それをさらに『観経疏』散善義にある「一明世尊随機顕益意密難知」の意密を解釈して行具の三心をも当然含むと考えていたように受け取れる。本願の三心と『観経』の三心については次にも述べるが、隆寛は完全に同一視している。そこで本願の念仏とは三心具足の念仏であると言い、その義は

> 称名号帰本願故称名号者不疑本願故称名号者被催欲生心故也
> 定知一称名号之声中三心具足無有欠減
>
> （安井広度『法然門下の数字』昭和十三年、附録一一一～一二頁）

であると言う。ここで「随機顕益」より、三心を発すべき人は他力に乗じて益を得る人である、と言うのである。それは取りも直さず罪悪生死の凡夫にほかならない。凡夫は他力に乗じて本願である念仏を称えれば、そこに発すべき三心が一声のうちに含まれているという理論展開をしているのである。またこの理論を指して意密と解釈するのである。

第四項　三部経を巡る三心の問題

隆寛は一貫して『観経』の三心と第十八願の三心それに『阿弥陀経』の一心を全く同じものであると見ている。特に本願の三心を行具の三心、それにあとで述べる他力の三心の根本

思想に置いていることがうかがわれる。また、隆寛は第十九願、二十願についても問題にしていることに特徴がある。

まず、『無量寿経』の第十八願と『観経』の三心の関係について見ると次のようである。

『具三心義』に本願の「至心信楽欲生我国」と『観経』の三心について「其言雖異、其意是同」とあり、至心と至誠心は「於二至之言一会二誠之義一決定無疑乎」と説明し、本願の信楽には浅深があるという疑義に対して「本願文中信楽唯取二深信一不二取浅信一」と言い、本願は一向称名の機に対して言うので「欲生我国」と言い、『観経』では「兼下回二余行一向二本願一機上故云二回向一」と説明している（『同書』一〇八～一一〇頁）。

『捨子問答』巻上の最後には本願の三心が『観経』の三心に同じことを述べ、「既二此三心ハ弥陀の本願ナリ。釈迦ノ所説也」（『続浄』九、一三頁上）と結び、三心の重要性を説いている。

『極楽浄土宗義』巻中にさらに決定的に本願の念仏と非本願の念仏は三心の具不具によって決まるということが記されている。

本願者称名（ナリ）、称名者即三心也。当知称名与二三心一同（ニシテ）、而非異（ス）。然則指二十念一為十声（コトハ）者随願也帰（スル）于称名（ノカニテ）。三種心故指二十声一為（ルコトヲ）十念（ハルニ）者随二心一也出二於三心一称名行故（ノカ）、是以不三発二三心一者非二本願念仏一（ノニ）、非二本願念仏一（ノニ）者不四可三生二本願土一

（『隆全』一、八六頁）

さらに『散善義問答』に『観経疏』の「意密難知」の意密を三心と解釈する部分があるが、その理由として

此三心即是法蔵菩薩五劫回思惟所発名願肝心也　又是無量劫間修行所円満本願密意

（『隆全』二、二三頁）

とある。

このように本願すなわち三心と言い、本願の密意が三心であると言うのである。

『極楽浄土宗義』巻中（『隆全』一、八〇頁）には、第十八、十九、二十願の三種の別を論じている。上述のように本願の機は必ず三心を具足すると述べ、十九願の機は

発菩提心修諸功徳人遇縁発三心蒙来迎得往生是也

二十願の機は

念仏与余行兼修信心不決定人忽遇縁発三心依他力故果以遂往生是也

とそれぞれ述べられ、いずれも三心を発すために往生できるのであるという理論展開となっている。

なお隆寛は諸行往生を認めている。しかし、本願の機すなわち三心を発した機は本土往生と言い、それ以外は辺地往生と言うのである。そこで十九願の機にも二種あるとし、

一者帰二他力一捨余行一方以二此人一同二十八願機一二者発二三心一後猶論二余善一既発二三心一故雖三論二余行一異辺地機一

（『隆全』一、八四～五頁）

と言う。

『散善義問答』には『観経』の三種の衆生の行を挙げ、往生極楽の行であるかどうかとの問いに対して、初めに往生のための余行を修する人は第二十願を、また随縁の果をなすために慈心持戒等の功徳を修する人は第十九願を手本とし、それぞれ

此人忽以回心帰弥陀一発三心一之時決定得往生一也

此人忽帰弥陀願一発三心一之時蒙迎接一得二往生一也

（『隆全』二、七七頁）

とあるように、三心を発することが条件となって往生できることが強調されるのである。

次に『阿弥陀経』について隆寛の見解を『具三心義』（『法然門下の数学』附録一一〇頁）に見れば、隆寛は「一心不乱」だけでなく「難信之法」「当信是称讃」「応当発願生彼国土」などの言葉はすべて三心であると言う。

このように隆寛は、三経のすべてに通じる心として三心を捉えていたと考えられるのである。

第五項　三心即一心

次に三心とは三つの心を別々に発すのか、と言う問題について考えてみたい。

『捨子問答』巻下に

> 凡ソ三心ト云ヘバトテ。別々ニ。三度起コスベキ心ニテハ無キナリ。夕ゞ慇ニ仏ヲ頼ミ奉テ。深ク極楽ヲ願ヒ。一心ニ名号ヲ唱ル人ノ心ヲ。三品二分テ三心トハ説ク也

（『続浄』九、一三頁下）

とあるように、一心専念の一心を分けて三心とするような解釈がなされている。

漢語体の『具三心義』および『散善義問答』には、それぞれ「名三体一」（『法然門下の数